

格子のないきらめき格子錯視

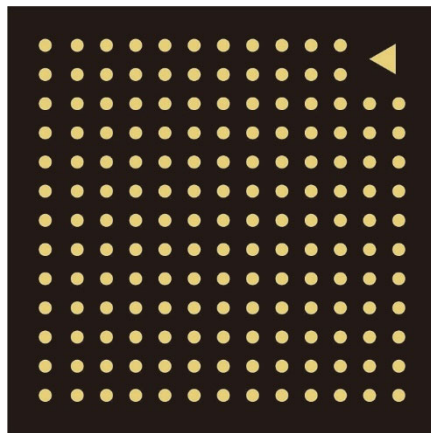
解説

きらめき格子錯視(Schrauf et al., 1997)とは、格子線の交点に円形パッチを配置することで、円形パッチの中に黒い錯視スポットがまたたいて知覚される現象を指します。この錯視はこれまで、その名があらわすとおり、「格子」によって生じると考えられてきました。

ところが、よく見ると、同じような錯視スポットは格子がなくとも見えます。本家のきらめき格子錯視に比べて、錯視の生起頻度は低く、錯視量も小さいですが、黒背景上に円形のパッチだけを並べ、視線を固定せずに眺めていると、ときどき視野周辺にきらめき格子同様の錯視スポットが見えます（背景が赤い場合は、錯視スポットも赤い）。見えにくい場合は、観察時間を長くしたり、画像サイズを調整（やや小さめ）したりすると見えるかもしれません。

発見経緯

tech 関連のニュースサイト上で、新開発された CMOS イメージセンサの裏面の画像(↓)を見つめているときに気づきました。



こういうもの。

生起機序についての考察

本錯視は、

1. 円ではなく四角形・ひし形にするとほとんど見えなくなる
2. 円の密度を変えても、錯視スポットの知覚強度(濃さ)は大きく変わらない
3. 円の空間配置を不規則にしても錯視スポットの知覚強度は大きく変わらない

これらから、この錯視は、要素間の局所的な空間相互作用や大域的な空間配置に依存し

て生じるのではなく、単純に、「視野周辺部に呈示されること」で生じる錯視(視野周辺部の一時的な処理不全)ではないか、と推測しています。きらめき格子錯視は、この錯視が格子線との空間相互作用によって、より強まったものかもしれません。

参考文献

Schrauf, M., Lingelbach, B., & Wist, E. R. (1997). The scintillating grid illusion. *Vision Research*, 37(8), 1033-1038.